

日田市埋蔵文化財調査報告書第18集

朝日ヶ丘遺跡

— 市営朝日ヶ丘住宅改築工事に伴う発掘調査報告書 —

2000年

日田市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成11年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施した朝日ヶ丘遺跡の発掘調査報告書である。
2. 朝日ヶ丘遺跡ではこれまでに県教育委員会が2度の発掘調査を行っていることから、今回の調査を3次調査とする。
3. 発掘現場での遺構実測は調査担当者、遺構写真は若杉・五十川が行った。
4. 本書に使用した実測図および製図は土居・五十川が行ったほか、財津香奈子氏の協力を得た。
5. また、空中写真は㈱スカイサーベイに委託したものを使用し、遺物写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいた。
6. なお、出土遺物や図面類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 本書の執筆は目次に記載している。
8. 本書の編集は調査員が協議し、五十川が行った。
9. 表紙の写真は遺跡北側上空からの空中写真である。

本文目次

1. 調査の経過	（土居）	1
2. 遺跡の立地と環境	（若杉）	2
3. 調査の内容	（五十川）	3
4. まとめ	（五十川）	6

挿 図 目 次

第1図 朝日ヶ丘遺跡周辺の主要遺跡分布図（1/25,000）	2
第2図 調査区位置図（1/5,000）	3
第3図 A区の遺構配置図（1/300）	4
第4図 B区の遺構配置図（1/300）	4
第5図 B区1号土坑実測図（1/30）	5
第6図 A・B区の出土遺物実測図（1/3・1/2）	6

図 版 目 次

写真1 作業風景写真	1
写真2 B区1号土坑完掘状況	5
写真3 調査区全景写真（空中写真）	7
写真4 A区全景写真（空中写真）	7
写真5 A・B区の出土遺物	8

1 調査の経過

昭和41年に建設された市営朝日ヶ丘住宅は建物の老朽化がひどくなったため、市住宅課が隣接する県営朝日ヶ丘住宅の立て替えと併せて改築工事を計画した。平成11年度の第1期工事は現在120戸ある住宅のうち、新たに25戸1棟の住宅および集会所の建設と駐車場スペースの確保であった。

こうした計画は平成10年6月に市住宅課より埋蔵文化財所在の有無についての文書として市教委に提出されたが、本計画予定地はすでに周知遺跡に該当し、さらには平成7・8年度に県営朝日ヶ丘住宅改築工事に伴って県教委が発掘調査を行っていたため、遺跡の存在が十分予想された。

これを受けて市教委では、平成11年8月に住宅建設予定地の試掘調査を行ったところ、遺構の存在が確認されたためその取扱いについて協議を重ねた。その結果、市営住宅および集会所建設場所については基礎工事の掘削が遺構面までおよぶことから発掘調査を実施することとし、駐車場予定地については発掘調査を行わず現状保存とした。

発掘調査は平成11年8月30日に機械を使ってA区の表土剥ぎを開始し、9月2日には遺構検出を始めた。9日には柱穴の掘り下げを開始し、10月11日に実測作業を終え、12日にはA区の作業を終えた。翌13日には機械を使ってB区の調査を開始する。17日には遺構を掘り始め、19日には空中写真を撮影した。25日にはB区の作業を終え、全ての調査を完了した。また、今回の改築工事では旧住宅の取壊し場所（C・D区）の立会いも行ったが、遺構や遺物の確認までにはいたらなかった。

なお、調査関係者は下記のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（文化課課長補佐兼文化財係長）、
佐々木豊文（文化課主任）、美野寿美香（文化課臨時職員）

調査指導 宮内克己（大分県文化課副主幹）

調査員 土居和幸（文化課主任）、若杉竜太（文化課主事）、五十川雄也（文化課嘱託）

作業員 秋吉ミユキ、綾部豊、猪熊ヨネ、貞国行義、高村笑美子、手嶋トシエ、舟橋京子
中尾タマエ、山本タケ、行村シヅエ



写真1 作業風景写真

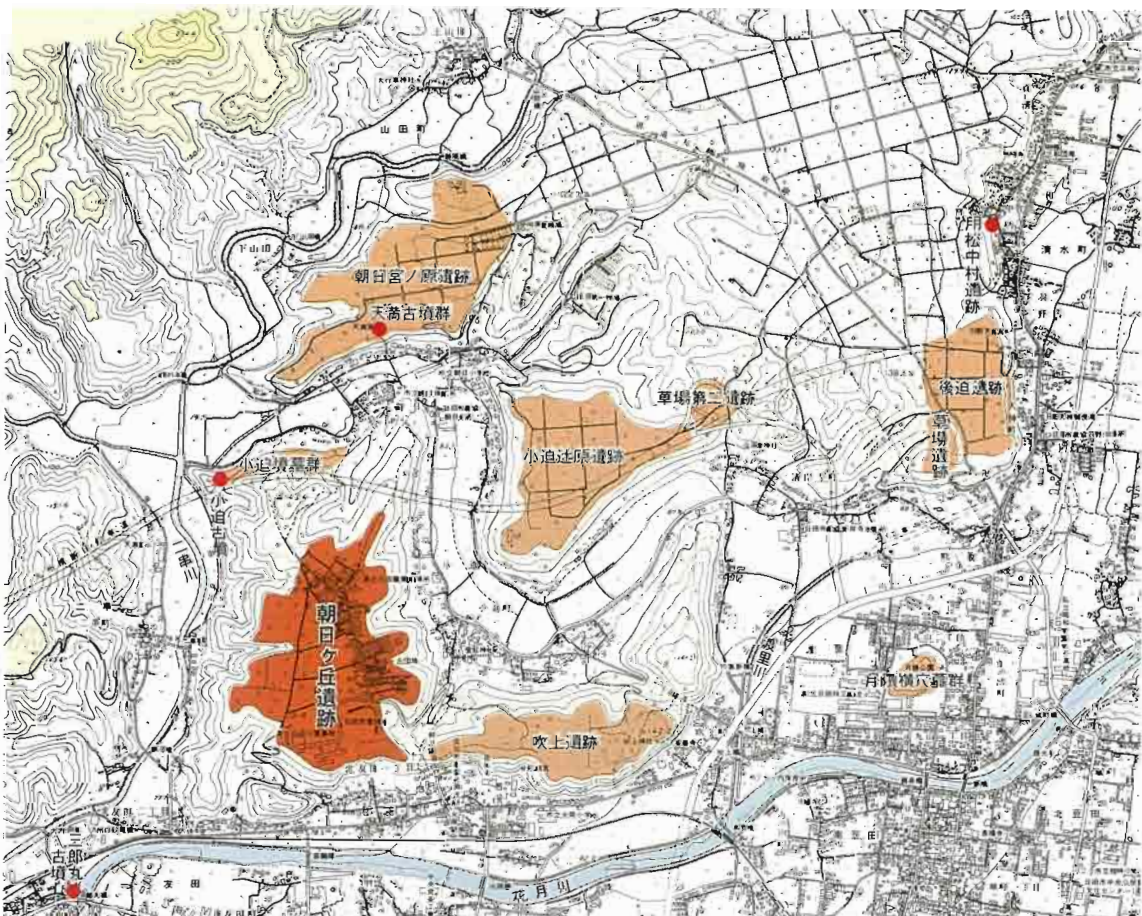
2 遺跡の立地と環境

朝日ヶ丘遺跡の所在する日田盆地は九州島のほぼ中央に位置し、有明海にそそぐ九州最大の河川、筑後川の上流域にあたる。盆地内は沖積地と低位の溶岩台地からなり、その四周を山地が取り囲む。周囲の山地は耶馬溪溶岩、筑紫溶岩が堆積して形成されたもので、いずれも高位において台地を形成している。盆地内は三隈川（筑後川）や花月川、二串川などの河川の侵食作用により台地が形成された後、月隈山・星隈山・日隈山などの丘陵を残しながら、現在の沖積地が形成されたと考えられる。

台地上には弥生時代から古墳時代にかけて大規模な集落遺跡がみられる。辻原台地では小迫辻原遺跡、吹上原台地では吹上遺跡、辻原台地の北西に位置する宮原台地では朝日宮ノ原遺跡、同じく北東に位置する山田原台地では後迫遺跡などが存在する。

朝日ヶ丘遺跡は標高約140mの吹上原台地西側に位置し、台地北側には小迫墳墓群や小迫古墳、同南側崖面には北友田・吹上横穴墓群が展開する。

また、台地東側の吹上遺跡では数次にわたって調査がなされ、特に平成7年度の6次調査では銅戈・銅剣などの武器類、勾玉・管玉・貝輪などの装飾品が副葬された甕棺・木棺墓群が発見されている。



第1図 朝日ヶ丘遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

3 調査の内容

(1) これまでの調査 (第2図)

吹上原台地の西側、朝日ヶ丘遺跡及びその周辺ではこれまでに数回にわたって発掘調査、試掘・立会調査が行われている。

発掘調査は県営住宅建設に先立って平成6年度(1次)、平成7年度(2次)に大分県教育委員会によって行われている。1次調査では縄文時代の陥し穴が、平成7年度の調査では土坑・柱穴、縄文時代早期の無文土器、弥生土器が発見されている。

試掘調査では日田市教育委員会が昭和59年度に住宅建設に伴う試掘調査(A地点)、昭和61年度に向原遺跡で確認調査(B～D地点)、平成7年度に鉄塔建設に伴う試掘調査(E地点)、平成8年度に市営朝日ヶ丘球場のグラウンド改修に伴う立会調査(G地点)、また、同年度に大分県教育委員会が行った三隈高校の校舎建設に伴う試掘調査(F地点)でも遺物・遺構は発見されていない。この他、三隈高校校門付近から甕棺の出土が報告されているが詳細は不明である。

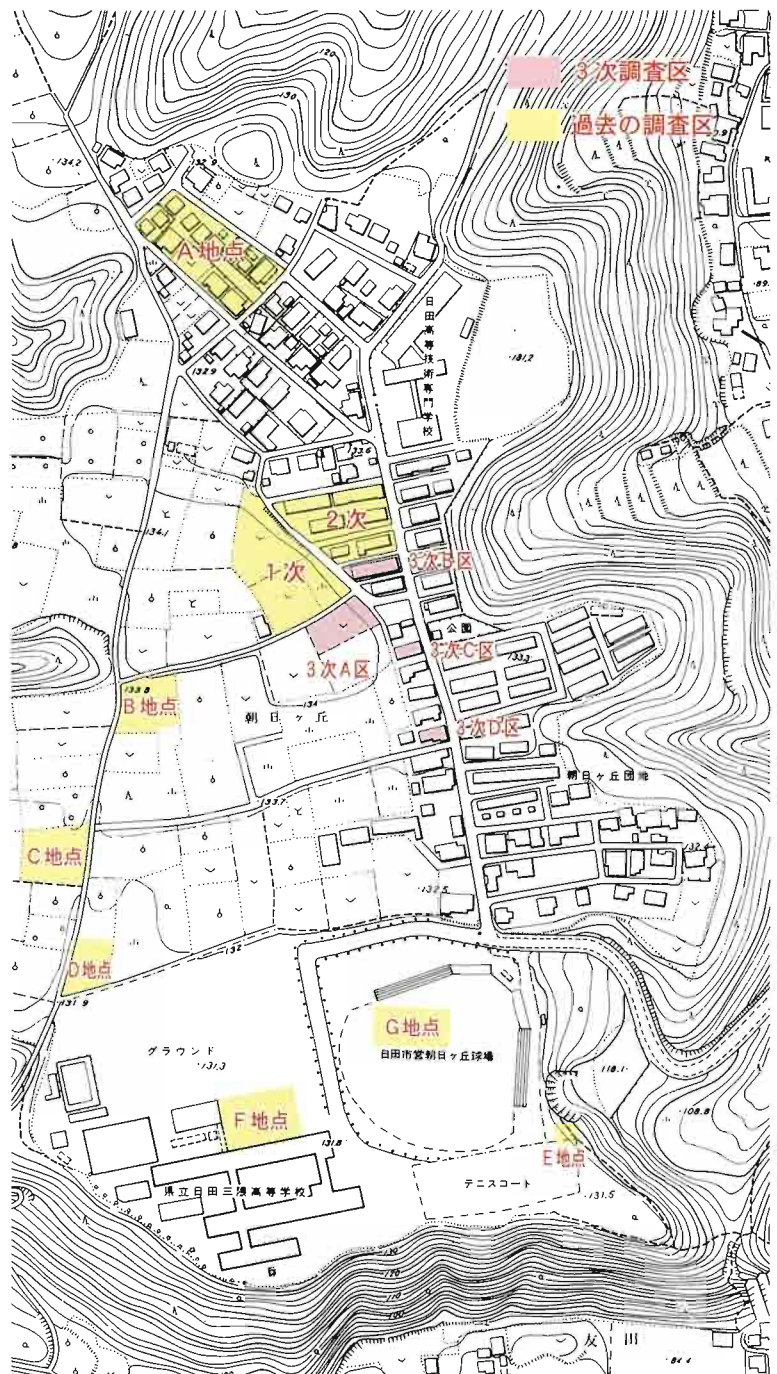
(2) A区の調査 (第3・6図 図版1)

A区は吹上原台地東側の標高約140mに位置する。今回の調査で検出された遺構の内容としては、ピットのみであった。出土遺物は第6図の1に示す縄文土器底部が、柱穴1から出土している。この土器の色調は内外面ともに茶褐色を呈し、胎土は長石、角閃石の砂粒を含む。時期は後～晩期である。第6図の9は柱穴2から出土した2次加工剥片である。右下片縁部に加工痕が残り、左下辺部には自然面が残る。安山岩製で、最大長2cm、最大幅4.5cm、最大厚0.8cmを測る。この他にも、縄文土器片数点が出土している。

(3) B区の調査 (第3・6図 図版1)

B区 (第4図 図版2)

B区はA区の北東方向に隣接している。このB区はもともと市営住宅の建物があり、そのコンクリート基礎が残っていたが、調査においてそれを除去することは



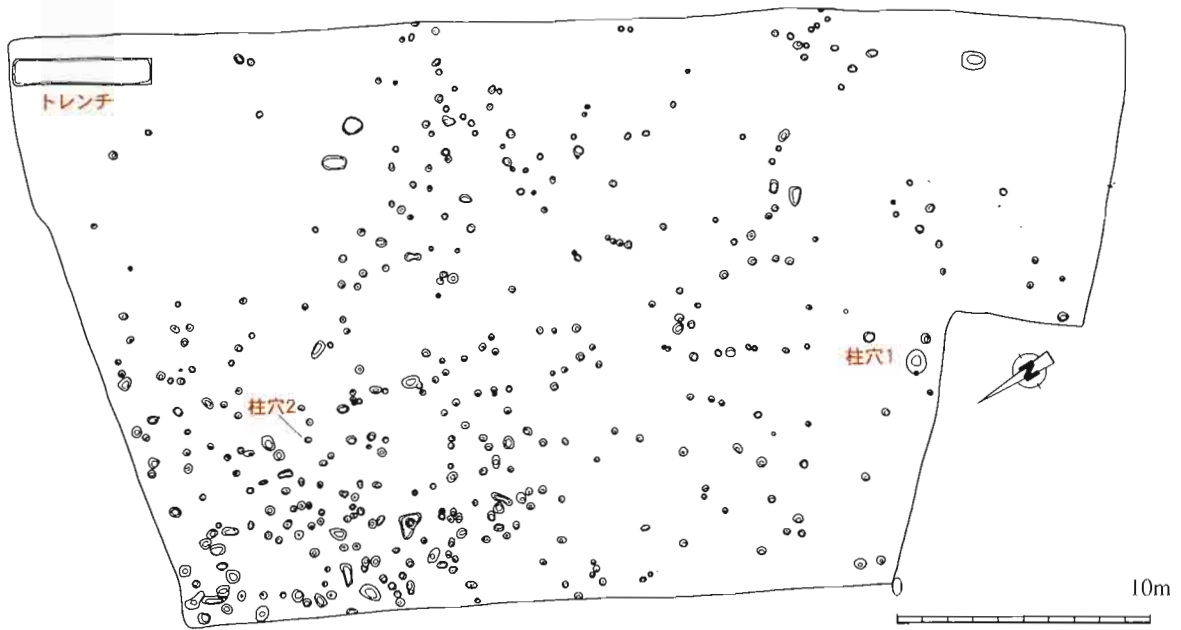
第2図 調査区位置図 (1/5,000)

が、調査においてそれを除去することは遺跡の破壊につながる懸念されたため、建物基礎はしたままとした。確認された遺構は溝2条・土坑2基・ピットである。

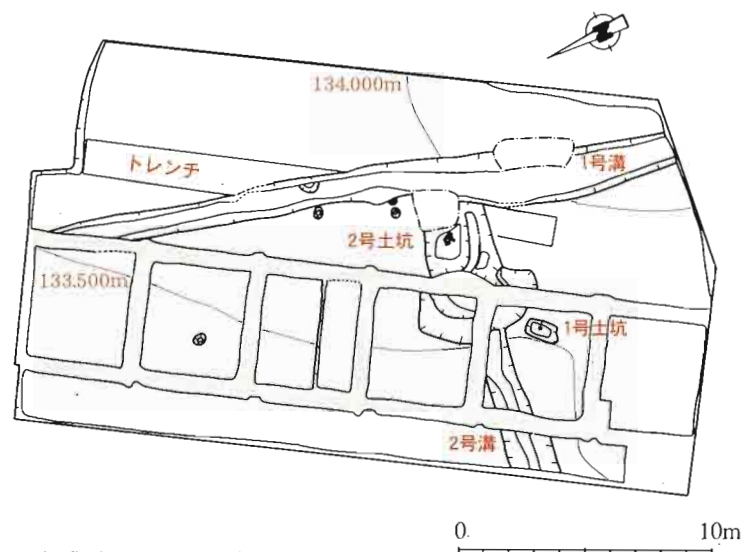
溝（第4・6図）

1号溝は南北方向に約25m延びる溝で、最大幅2m、深さ0.1mを測る。溝の一部は北側で攪乱を受けていた。

この1号溝からの遺物（第6図4～8）は産地が小石原か小鹿田の系列のものと推定される播鉢片が出土



第3図 A区の遺構配置図（1/300）



※アミ部分はコンクリート

第4図 B区の遺構配置図（1/300）

している。4は口縁部で、色調は内外面ともに褐灰色である。5も口縁部で、色調は外面が暗赤褐色である。6は胴部で、色調は内外が明褐茶色、外面は茶褐色を呈し、胎土色は白黄色である。7は底部で、復元底径12.8cmを測る。色調は内外面ともに暗赤褐色を呈し、胎土色は白黄色である。8も底部で、復元底径12.4cmを測る。色調は外面が灰褐色で、胎土色は白黄色である。このほか、陶磁器片などの出土があったが、小片のため図示はしていない。

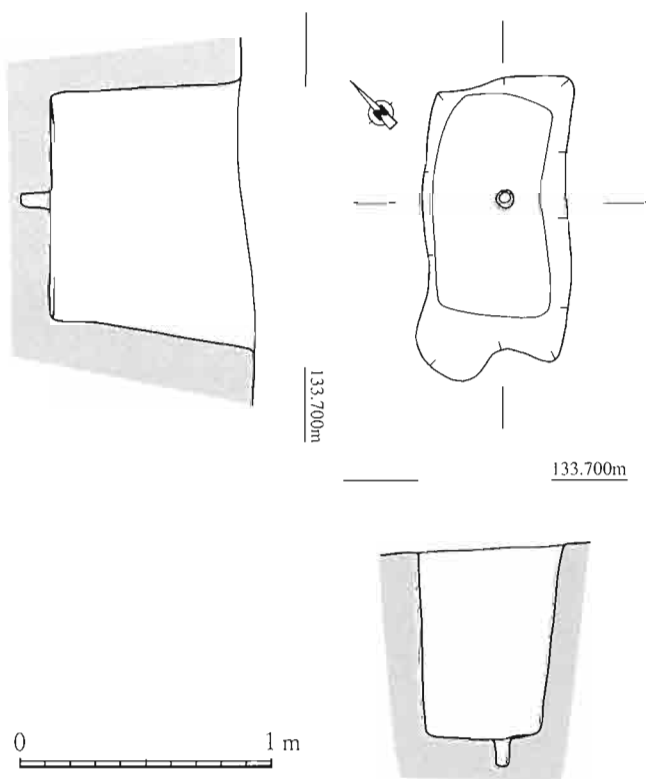
2号溝は東西方向に約6m延びる溝で、最大幅2m、深さ0.2mを測る。この溝の東側は2号土坑によって切られている。この溝からは遺物の出土はなかった。

土坑（第5・6図 図版2）

1号土坑は長軸1.2m、短軸0.75mを測り、平面形は隅丸長方形をなしている。また底面中央には径5.2cm、深さ11cmを測る小穴1つを有し、壁面は四方ともほぼ垂直にたちあがっている。なおこの土坑からは、遺物は出土していない。

2号土坑は最大径5m、深さ1.3mを測り、平面形が不定形で、部分的に3段掘りをなし、2号溝を切る。また底面より約15cm上で約10~20cmの河原石が数個まとまって出土している。

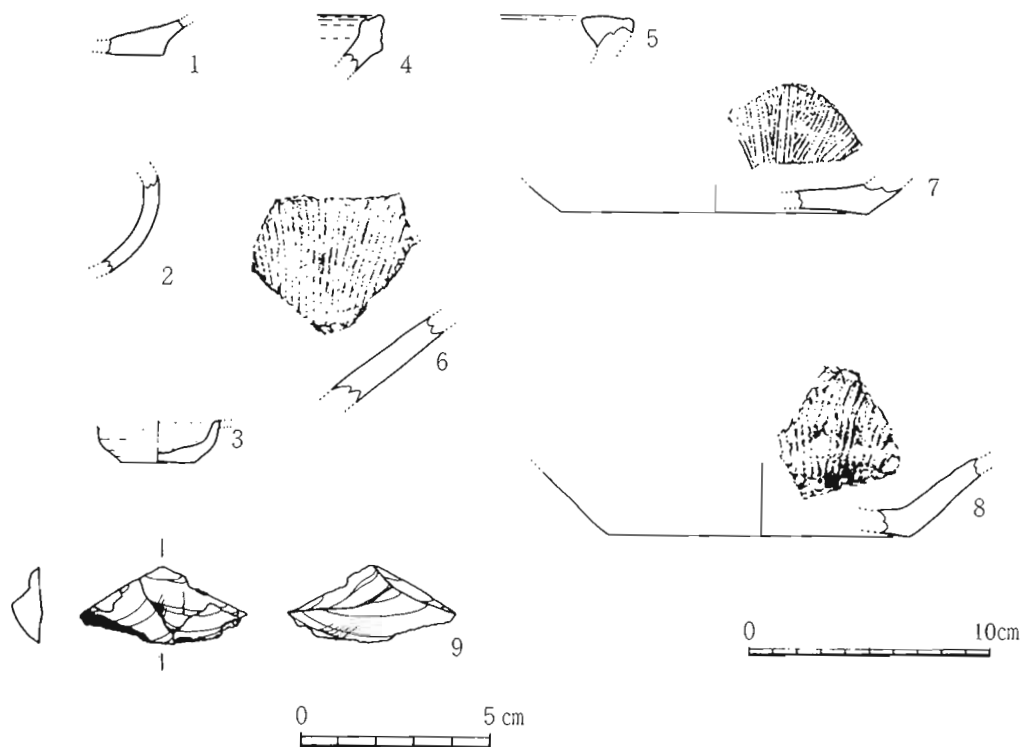
出土遺物は、第6図に示す須恵器片や陶器が出土している。2は平瓶で、色調は外面が暗灰色、内面は灰色で、外面には自然釉がかかる。調整は外面がカキ目、内面は回転ナデである。3は小型の容器である。器高1.8cm、底径3.1cmを測る。色調は外面灰色、内面黄黒褐色で、鉄釉がかかる。底部は糸切りである。



第5図 B区1号土坑実測図 (1/30)



写真2 B区1号土坑完掘状況



第6図 A・B区の出土遺物実測図 (1/3・1/2)

4 まとめ

今回のA区での調査では、ピット群の検出とそれに伴う縄文土器、石器が数点出土した。これらピット群については、建物の柱穴を想定し検討したが、建物となりえるものは確認できなかった。

B区では溝2条、土坑2基、ピットが確認された。まず、2条の溝はその形態などから同時期と思われ、畑の区画溝と推定される。溝からは播鉢片・陶器が出土しており、時期は近世以後であろう。次に土坑は、2号は性格が不明であるが、1号はその形態などから陥し穴である可能性が考えられる。この陥し穴についてはA区や2次調査地点では確認されていないが、1次調査地点では縄文時代後期以前の陥し穴(註)が数基検出されている。近接する調査地点で発見されているところをみると関連がありそうで、そうであるとすれば台地中央から東側へ向かって掘られていると予想される。

最後に、この遺跡はまず吹上遺跡が隣接し、さらに周辺の台地上には小迫辻原遺跡や朝日宮ノ原遺跡、後迫遺跡などが立地している。特にこれらの遺跡には大規模な弥生集落がみられるなかで、この朝日ヶ丘遺跡のこれまでの調査結果からすれば弥生期の集落痕跡は極端に稀薄な場所として捉えることができる。例えば先にあげた後迫遺跡の所在する山田原台地では、中央部が稀薄で、その周辺部の方が密度が高いことから、これから先の朝日ヶ丘遺跡の台地上周辺部の調査が注目される。そして、弥生時代に限って見た場合のこの遺跡の稀薄さが、周辺の遺跡からみてどのような意味をもっていたのか、またどのような在り方であったのかは今後の課題である。

(註) 大分県教育委員会「朝日ヶ丘遺跡」『大分県埋蔵文化財年報5』1997

写真3 調査区全景写真（空中写真）



写真4 A区全景写真（空中写真）





1・9……A区
2～8……B区

写真5 A・B区の出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	アサヒガオカイセキ							
書名	朝日ヶ丘遺跡							
副書名	市営朝日ヶ丘住宅改築工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	五十川雄也・土居和幸・若杉竜太							
編集機関	日田市教育委員会							
所在地	〒877-0025 大分県日田市田島2丁目6-1							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
あさひがおかいせき	大分県日田市大字	651	217			19990830 ～19991025	1,250㎡	市営住宅 等建設
朝日ヶ丘遺跡	小迫字小迫原625-1他							
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
朝日ヶ丘遺跡	A区	縄文時代	柱穴	縄文土器・石器				
	B区	縄文時代 近・現代	陥し穴 溝	陶磁器				

朝日ヶ丘遺跡

市営住宅改築工事に伴う発掘調査報告書

朝日ヶ丘遺跡

— 市営住宅改築工事に伴う発掘調査報告書 —

平成12年3月31日

発行：日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷：日田時報紙器印刷株式会社

